

ねえ
おし
やか
さま

目次

ねえ おしやかさま 5

オン カカカ ビサンマエイ ソワカ 28

母 44

しんだ か 64

ねえ おしやかさま

この間気がついたのだけれど

インドのおしやかさまは

温かい乳粥ちちがゆを召し上がられて

静かに冥想めいそうされて

ブツダとなつて

仏教の開祖だ

でも

「不知は答えず」

とって

死んだらどうなるって

聞かれても

知らないから

答えられなかったらしい

「死んだことがないので」

「死んだ人から聞いたこともないので」

それで 知らないって

いわれたらしい

でまあ

みんな心配になっ

ていろいろ考えました

おしゃかさまのいうことには

ものごとは相互に関係して

存在している

縁起えんぎの理法りほうというのだそうで

では では

と みんないろいろ考えました
そうか

では では

相互に関係しているのだから

おしやかさまが おられるのにも

何か関係するものがあつて

何かのゲンインがあるのだ

では では

ブツダとなられた ゲンインは

では では

この世の

修行だけではなくて

実はおしやかさまは

永久の昔から仏様で

たまたま地球のインドに現れたという

そういうことになった

この昔からのおしやかさまを

くおん久遠の釈尊という

りようぜん霊山浄土というところにおられて

みんな死んだら引き取って下さるらしい

ま、それで一安心なんだけれど

インドに現れた おしやかさまは

「わたしは 過去から 生きていた」
なんて

何も言われていないので

やっぱり

心配は心配で

いろいろ

偉い方が

思し索さくされて

では では

仏さまは　たくさんおられて
じつは

過去から　未来へ

未来から　過去へ

四方八方　上下左右

十方世界に　常在して

この中の

阿^あ弥^み陀^だ様というお方

「私の名前を唱えなさい」

死んだら全部

救ってやる

そう誓われて

仏さまに
なられたらしい

でまあ

そういうことで

おしやかさまは

言われたそうなの

われわれが

死んだら 頼りなさい

阿あ弥み陀だ様に

そういうことになりました

なにせ

極樂浄土ごくらくにおられて
死んだら 須臾しゅゆに
迎えに来て下さる

その極樂は
瑠璃るりや玻璃はりや

といった寶石があふれていて
なにもかも 金銀珠玉しゅぎよく

輝いて

そんなもので 出来ていて

男女の別がなくて

でも でも

天女さんはいて

妙なる調べがあつて
暑くもなく寒くもない
とてもいいところらしい

なにせ

死んでから 行くので

もう 死ぬこともないらしいから

俗人の私には 退屈すぎて

なんだかなあ という もつたない愚痴になる

すみません

ところが

実は違うのだそうで

極樂浄土という名前に騙だまされてはいけない

苦はないかわりに

楽もないそうで

そこに引き取って下さるが

なんと

なんと

なんと

なんと

そこで仏になる

つまり成仏するために修行をして

その修行の一環として

地球に戻って

肉親知人も他の人々も

助ける仕事をするのだそうだ

では では

極楽浄土に成仏するのではなくて

極楽浄土という名前の厳しい修行の場所

そこで阿^あ弥^み陀^だ様からのビシバシ指導が

待っているわけだ

まあ、恐らく仏様の指導というのは

体罰ではないだろうし

バカ アホ マヌケ

といった悪^{あく}罵^ばや

「死んでまえ！」

といった暴言は

もう死んでいるので

ないだろうし

嫌みや下卑げびた例えもないだろうから

楽しく力が伸びる

女子サッカーの

なでしこチームの監督のような

方法なのだろうと思う

阿弥あみだ様は

おしゃかさまの指導をされたのか

兄貴分なのか

大きいのか

小さいのか

そのところが

よくわからないが

とにかくおしやかさまの

同僚で

とにかくお二人が力を合わせられるらしい

もうお一方

大日如来という方もおられて

この方は宇宙そのもので

仏の中の仏という

では では

どの仏様を拝もうと

結局はこの方に辿り着く

という偉い方

宇宙そのものが仏だというのは

あるがままのものがあるがままに受け入れること

その方が助けに来られるか

どうか となると

よくわからないが

まあ、キリストのような

神様のような方らしいが

しかし 宇宙を創ったのではない

ちよつと違うのかも知れない

宇宙そのものだと言うから

ビックバンから

宇宙の最後まで

変化をしても 常在で

なんのこつちやと

頭を捻^{ひね}るが

摩訶不思議^{まかふしぎ}

これだけややこしいので

貧しい心で考えてみる

この地球に

人間として

確かに存在されたのが

おしやかさまらしいので

その事は信じるとしても

私は

あの方々はよく分からない

でもおしやかさまが亡くなられたあと

この地球には

五十六億七千万年後に

弥勒菩薩みろくさまが出現する

という話もある

でも

太陽の寿命が

あと五十億年くらいと言われているし

地球の寿命も

それより短いので

弥勒さまが出てこられたときには

はて

では では

と 思わぬ事もないが

ま 細かいことにはこだわらず

おしゃやかさまのあとは

地藏菩薩が助っ人におられるという

話もあつて

これの方がつじつまが合う

しかし おじぞうさまは

ご自分の 浄土がないので
では では はてな
死んだら 何処へ行くのだろうか

私はたぶん

おしやかさまの処だと思う

おしやかさまは

なにせ

現実的で

合理的で

現象世界を

見つめられて

苦しみから

逃れられない人の
自死を

安らぎ

として

おだやかに

見つめておられた

現実に 生きておられた

人の姿で

その お心は

合理的で

優しくくて

私は

おしゃかさまを

たよりたい

おしゃかさまは

おじぞうさまに頼んで

まあ

阿^あ弥^み陀^だ様でもいいけれど

きちんと

あとのこと

考えておられる

だから 私は

おじぞうさま

阿^あ弥^み陀^だ様

いろんな ほどけさま

いろんな かみさま

に 頼んで

そしてもちろん

おしやかさまに 願って

さいごは

おしやかさまのところに

行かせていただこうと思う

断られたら困るけれど

地獄へいけ

あつちやへいけ

知らん

と 言われても困るけれど
そんなはずは
ないはずで

いまのところ
残された生を
精一杯

善く良く

歩みたいと考えている

ねえ おしやかさま



オン カカカ ビサンマエイ ソワカ

オン カカカ ビサンマエイ ソワカ

オン カカカ ビサンマエイ ソワカ

オン カカカ ビサンマエイ ソワカ

なんのこつちやい

えらいこつちやい

真言だ 真言

インドの 音 そのままの言葉

言葉の魂

言葉の霊

オンは オームなんて言って

聖音なのに

その昔 ひどいことをした人たちが

オウムと 名乗っていた

ぼくは 初めて聞いて

妻と顔を見合わせた

妻は長男と顔を見合わせ

長男は次男と顔を見合わせ

次男は

「なんで鳥なんや」

と言った

ぼくも

「なんで 物まねオウムが 信仰なんや」

と思った

ま、それは おいておく

でも 一言

ひどいことをしたので

やっぱり一度

地獄に墜ちると思う

新しい人たちは

思い込まないように

こだわらないように

古い人たちも

こだわって

こだわりすぎないように

でも

こわいはなしだ
ね おじぞうさま

オン カカカ ビサンマエイ ソワカ
オン カカカ ビサンマエイ ソワカ
オン カカカ ビサンマエイ ソワカ

ソワカは

よく でもないが

度々 でもなくて

時々 でもないが

聞いたことがあつて

「なんとか そわか！」

と使うらしい

オン と ソワカ のセットメニュー

「うまくいくようにお願いします」

ビサンマエイ は

「たぐいまれなお方」

とすると

謎解きは佳境だ

カカカは おじぞうさま

でも でも

でも でも

おじぞうさまを讃^{たた}える

真言は 他の仏さまと違つて

チート チトト

チト チトト

可笑しい

カカカ は ハハハ

ワハハ に ホホホ

フフフ に へへへ

なんと

なんと

なーんと 笑い声

Om ha ha ha vismaye svaha

Om ha ha ha vismaye svaha

Om ha ha ha vismaye svaha

おじぞうさまの 笑い声
笑い声だが おじぞうさま

でまあ

好きだ

がまあ

お名前がないので

はてさて

可笑しい

本当は

クシテイガルバさま

お名前は

クシティガルバさま

わからない

わからない

わからない

名前だから

それでいい

ヒラリー・クリントンは

ヒラリー・クリントンで

ひらり　くりきんとん

ではない

でも　ここではやはり

いくらなんでも

なんなので

クシテイは「大地」

ガルバは「蔵」

なるほど

なるほど

おじぞうさまか

おしやかさまから

後を頼まれて

地獄

餓鬼

畜生

修羅 しゅら

人界 じんがい

天界 てんがい

六道 ろくどう

を 驅 か け ず り 回 っ て

水子も赤子も幼子も おさなご

子どもも大人も悪人も

みんな助けて回る

身代り地蔵

「代受苦」 だいじゆく

なんて

身の毛もよだつ

おじぞうさまは

苦しみを

代わって受けて下さる

という

という

ということが

どんなにすごい

ことなのか

これはもう

母親以上に違くない

父親以上に違くない

かみさま

ほとけさま
いじょうに
凄いに違いない

ハハハ

と笑つて

ろくどうりんね
六道輪廻の世の中を

とびまわり

につこりされて

救われる

でも

でも

でも

閻魔^{えんま}様は

おじぞうさまの

別の姿だとも言う

ははは

ははは

ハハハ

へへへ

のへ．．．．

甘えていてはいけない

おじぞうさまはそこら中に

おられるので

街中にあふれる

監視カメラより凄くて

なんでも知っておられる

だから

おじぞうさまをだましたりは

できない

閻魔様の

顔の奥に

おじぞうさまが隠れていて

「これこれ 本当のことを はなしなさい」

と言われるのだ

私なんぞ

心の奥が汚いので

なんとか

きれいになりたいのだけれど

石鹼でも

シャンプーでも

塩素系漂白剤でも

だめなようなので

せめて

せめて

毎日

毎日

罪を犯しては
反省して

反省しては
罪を犯している

泣きたいくらいに

ハハハ なのだ

けれど

それでも

ま いいか

ね おじぞうさま



母

酸素マスクが鬱陶^{うつとう}しい

母は手で払いのけようとす

その度に

私の手が伸びて元に戻す

「お母ちゃん、これな、外すと死ぬんやで、がまんしてな」と呟く

なんども なんども なんども なんども

外したままで すつと逝かせたい 気もするが

苦しむと怖い

苦しむと怖い

若い医師には

苦しめないように 痛くないように といつてある

だから

注射も 薬も 点滴もない

肺炎は 一週間前だ

弟と一日交代で

そばについたままだ

病室のカーテンを

六階のナースセンターの灯りが

微かに揺らしている

深夜の病院は

闇の中に沈んで

病室の蛍光灯が

冷たく凍りついた

光を放っている
母の手が無意識に
マスクに伸びると
私の顔の皮膚がはつとして
手が緩やかに動く
「あのな、これ外すと死ぬんやで」
何回も 繰り返した 言葉が
灯りの中に拡散する
長くはない命が
ベッドの上で
静かに眠っている

母は

認知症で 歩けなくなり

私 が 私 で なくな った

息子の私も

私の息子で なくな った

「希望」と言う名の

老健施設は

二階の食堂が入口

その入口は 大きなガラス戸があつて 鍵が掛けられている

入所者が 食堂から出て エレベーターや階段から

彷徨さまよい出ないように

私と妻が訪問すると

ガラス戸を開けて 母が出てきて 面接部屋で話をする

大正十二年生まれの 母は 八十一歳だ

父も母も相前後して認知症になった

父の程度は軽くて

老人マンションに独り暮らしだが

このところまだら呆ぼけで 時折

「あれは死んだのか」

と 母のことを聞く

あいたいようで あいたくもないようで

表情の浮かばない目をしている

若い頃から凄まじいDVで 母のことを散々殴ってきた

二人の息子が大きくなると

さすがに手を出すことは少なくなつたが

息子二人が独立すると

また 殴るのが少し始まっていたらしい

回数は少なくなつた

でも 孫が大学を出て就職しても

まだ時折 母を殴っていた

母は独りっ子で 師範しはん学校から 小学校の教師になり

学童がくどう疎開そかいに付き添い

戦後、復員ふくいんしてきた父と見合い結婚した

当時は 若い男性が大勢死んで

婿むこ一人にトラック一杯の花嫁

と言う世界である

尋常じんじょう小学校卒 が多い中で

商業高校卒 大銀行勤務の父は
美男子で 温和おとなしかつたらしい
結婚して 母の実家に同居した
神戸市も空襲くわしゅうで 焼け野原
一年後に 高取山の麓ふもとに 家を見つけた
それから 父のDVが始まった
毎日へべれけで午前様
ちやぶ台返しに 包丁持ちだし
母が裸足はだしで飛び出したシーンは覚えていて
「俺が喰わせてやっっている」が口癖で
当たり前前あたり前まへのことが自慢できた時代
第二次大戦後 『火垂るの墓』の時代

母は 多分私が小学生の頃 離婚を考えた

結局 耐えた

女性の仕事など ろくにならない時代

女性へのセクハラや パワハラなど

当たり前の世界

夫の暴力なんぞ 日常茶飯事だったのでろう

よく戦中や 戦前の^{たくま}逞しい女性のドラマがあるが

無言の民の D V ドラマなど 焦点が当たらない

作り手が男なので

自分の所業を 抉^{えぐ}るのは 考えも浮かばない

私と弟は なんのことはない

母に育てられたようなもので

父は憎むべき男だが 親なので 手が出せない

道徳は 道徳

ちよつと 考える 道徳

よくまあ 詩など書くくらい 拗すねずに育つたのは

母のおかげ

四十代に入つて ようやく息子も大きくなり

母は新聞などにも取り上げられる

放送作家となる

これからいよいよよというその矢先

父は仕事につまずいて

妻子は路頭に投げ出され

自営業をはじめたものの

家事と仕事に 追いまくられて
母の夢は父の手で断ち切られ
私と弟は それぞれ進学を諦めて
ホッと一息ついたとき
既に 五十を 越していて
六十前に 孫が出来
貧しいながらも平穏な 日常で
父母は揃って 読売旅行
一万円で アチコチ ミニ旅行
それでも時折 DVで
これはもう病気 黙って耐える母が
悲しくてならなかった

「離婚したらええねん」

「お母ちゃん一人やったらめんどうみるで」

兄弟揃って勧めても

母は黙って笑うだけ

それが自分の人生と

やっぱりこれが自分の亭主だと

諦めているようでもあった

その母が 小さなマンションで

認知症になり 起きられなくても

父は

「おきんかい」と 手を出して

「あんなもん 殺したるか」

私と弟は 唾^だ棄^きすべきと思つたが
やっぱり

親は親

母は亭主を諦めていて

いえ 自分の人生はそう言うものだと言
い聞かせているよう

結局 父は老人マンションへ

母は老健施設へ

「希望」の担当者から 母が肺炎だから
隣の病院に入れると 電話があり
私は妻と慌てて駆けつけた

入口のドアを開けると二十畳ほどの事務室で
反対側にドアがあり

またまたそこには鍵がかかり

飛び込んだ

私と妻は 本当に 棒立ち

大きな病院の待合室

広い空間が 最後の日が沈んだ直後のような

薄暗い光で満たされ

そこに十人 いや二十人 それ以上の人が

ゆらゆらと立っている

「おばけか・・・」と

心がきゅつと縮んで 悲鳴を上げた

誰も表情がなく

目鼻口はあるものの
海底で揺れる海草のように
ゆらゆら立っている

母は

と慌てて見回してみると

片隅のベッドに

右手を括り付けられて

眠っていた

「あかんで」

「ここ精神病院や」

「徘徊する高齢者 薬で」

「すぐ出そ」

弟は殺気立って

私も気が動転して

介護保険は始まったばかり 施設はろくになく

みんな手探りで 比べるところもない

弟のついで ごく普通の病院の一室に

母を ようやく移した

長くはいられなくて

病院のお世話で

新しく出来た老健施設に 母はうつり

そこで 平穩に 何年かが過ぎた

私が行くと

時に私は 母の父親になり

母は娘に戻る

「ゆうやけこやけ」が好きで

突然歌い出したかと思うと

「あんた あほやろ」

というので

「アホ チャイマンネン バカデンネン」

と答えることにしていた

その母が肺炎になり最後に移されたのが

大きな医療センター

点滴も 注射も

呼吸が止まったあとの心臓マッサージも

勘弁^{かんべん}して貰う

ただ、酸素マスクだけは 外すと 死につながる
だから

「お母ちゃん、これな 外すと死ぬんやで、がまんしてな」
私は言い続けた

「兄ちゃん 亡くなったで」

弟から電話があつた

深夜近く

日付が変わると

私は自分の退職を控えた

中学校の卒業式

式辞を読まねばならない

妻と 病院に 飛んだ

弟夫婦がいて

「穏やかだったで」

一言に ホッ とした

しんどい人生の幕が

とりあえず 静かに降りたのだ

母の遺体を 葬祭会館の一室に安置すると

私は自宅に戻り

モーニングを着て

卒業式に出た

職員には

ごく一部しか 母のことは知らせていない

「卒業証書」と

三年生全員に渡し終え

式辞を読み終え

来賓の退場を見届け

職員にお礼を言って回った

「校長先生 無理されませんように」

退職近い女先生が

そつと囁ささやいて下さつた

私は 葬祭会館に とつて帰る

ほとんど眠っていない身体も 心も

ぴんと張ったまま

母は化粧をして

静かに眠っていた

弟夫婦と孫たちだけの賑やかな
見送りに
母は 微笑んでいるようだ
私は 心の中でそつと呟いた
「お母ちゃん きれいやで」



しんだ か・・・

親父が死んだ

八十五年の生涯だったから

平均寿命より長くて

数字としては幸せなんだと思う

親父の母は連れ子をして

日露戦争から帰った親父の父と再婚したらしい

その連れ子は親父の腹違いの兄になるが

幼い頃に養子にやられて

親父とは全く別の人生を歩んだらしい

らしいらしいというの

もう半世紀も前に

親父の母の財産

といつても小さなしもた屋だが

それを勝手に処分したとか

しないとか

喧嘩別れをして

その後

阪神淡路大震災もあり

生き死にも判らない

親父にしてみれば

ろくに話したこともない

兄貴のことなど

知りたくもなかったのだろう

そんなわけで

親父は 独りっ子のよう

大切に育てられた

大正生まれには珍しく

商業高校出身

それが幸い 大銀行に入っ

それが不幸のはじまりで

仕事のストレスから

毎日毎日午前様

アル中もどきになり

目が据わり

家ではおふくろを殴り

包丁を持ちだし

ちやぶ台をひっくり返していた

長男の私にとっては

もの凄いストレスで

両手の爪噛みは

皮膚を食いちぎり

血まみれになつてもなお食いちぎり

弟と二人

親父など死ねばよい

どころか

刹那には

ころしてやろうか

とまで

しかし

親は親

せいぜい

親父の

おふくろに向かう

拳の前に立ちふさがるぐらいで

それがおとなまで続いた

不幸のはじまりはまだまだあつて

私が目出度く高卒後

親父は人のよさから断れず

銀行員でありながら

中小企業の借金の

連帯保証人

まさにまさに

絵を描いたように

社長は行方をくらまして

親父はみごとに免職で

小さな住居も取り上げられて

おふくろ米びつ眺めつつ

食べる米ない生活へ

でもまあ

やっぱり

根は真面目

倉庫番をしたあとは

六十五歳で高速道路の料金徴収員

お酒も少しはましになる

それでも時にはおふくろを

殴りつけてはいたようだ

苦勞をいっぱい背負い込んだ

おふくろは

介護度五で この世を去り

親父は独り五年間

八十ころから認知症

なんとか私は息子と判り

運よく入れた老健施設

時のゆくまま 生き続け

息子の私の

週に一度のご訪問

ほんの短い時間をば

「どうや」

「なんかいるか」

「ほな また来るわ」

或る日

親父の目に光がともし

「イイチロウ」と私の名

孫のことを色々と

あらら認知症が治ったか

思っていたら三日後に

親父死亡のお知らせが

静かだったし

穏やかだったし

おふくろを殴り

妻子を路頭に迷わせ

酒に酔って据わった眼は

閉じられていて

夢を見ているようだった

葬祭場の湯灌に清拭

私が一番前にいて

背後に私の息子たち

親父の顔を見ていたら

不意に瞼が熱くなり

目の玉ふくれて

爆発し

おいおいと

とめてもとめても

おいおいと

還暦男が泣き出した

悲しかったのではないのです

寂しかったのではないのです

終わった安堵感でもありません

でも遠慮なく、大の男が

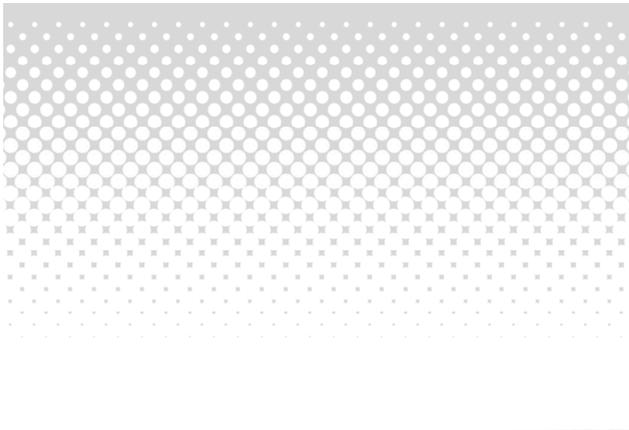
充分喚いて泣きました

し
ん
だ

か

と

思
っ
た
の
で
す



大西亥一郎（おおにし・いichiro）
神戸市生まれ、神戸育ち。
公立中教員・県教委指導主事・市教委課長・中校長・短大准教授
1981・1982年 小学館「わが子に贈る創作童話」優秀賞受賞
1984年 日本童話会新人奨励賞受賞
1999年 半どん文化賞（及川記念賞）受賞
・ポプラ社「心があったかくなる話 4年生」
・リブリオ出版「兵庫の童話」
・神戸新聞出版センター「海とめんどりとがいこつめがね」
・偕成社「学級ノートのミステリー」
・兵庫県学校厚生会「ひょうごの童話」 他
小説・童話 明石市文芸祭市長賞「氷」「星月夜は車の日」
随筆・童話 神戸新聞文芸入選「あとのまつり」「記者のたまご」他
2008年～ 「アクトス」代表・編集人。
2010年～ 東はりま文化 子午線編集企画顧問
2011年～ 梅檀編集委員
現在：梅花女子大学非常勤講師

〔総合文藝誌『アクトス』臨時増刊号
第5巻第4号・通巻第20号〕

第一詩集

ねえ おしゃかさま

二〇一三年五月五日発行

第一版

著者 大西亥一郎

発行者 大西亥一郎

発行所 大和評論社

〒六七三―〇〇三

兵庫県明石市宮の上一十七六―一四

電話〇七八（九二三）四五六二

非売品（頒価八〇〇円）

©2013 Ichiro Onishi